

---

# メモリー

栖坂月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メモリー

### 【Nコード】

N2667P

### 【作者名】

栖坂月

### 【あらすじ】

人間は、忘れるが故に人間である。しかし、ロボットの物忘れと  
いうのは、如何なるものであるのだろうか。これは、そんな謎に鈍  
く切り込んだお話である。

(前書き)

最近怠けていたらストックがなくなりまして、仕方なく古いフォルダから引っ張り出してきた作品を少しばかり修正したものです。

最近の作品に比べると、少し描写が単調かなーと思わなくもありません。

人間って成長するんだ。偉いね(笑)

メイドロボットなんて言葉が世の中に出てきたのは、もう親父が子供の頃の話だ。それが『生活補助用アンドロイド』なんていう可愛げのない名称で現れてすでに十五年、リアロイドとかつて名前を浸透させようと躍起になっている企業努力も虚しく、世間的にはメイドロボという愛称が定着している。各家庭に一体というほど普及はしていないが、それなりに裕福な家庭には珍しくもない存在となっている。

かく言うウチにも『ミドリ』と名付けたメイドロボが一体おり、今は家事の一切を受け持つてもらっている。ちなみに名前の由来は瞳の色が鮮やかなエメラルドグリーンをしていたからだ。一目見て迷うことなく妻が付けた。

「トシオ様、よろしければ紅茶でもお淹れしましょうか？」

「ん？ ああ、それじゃあ頼むよ」

今日は久しぶりの休日だ。妻が生きていた頃なら、三人でどこかに出かける算段でもしていたかもしれないが、オレとミドリだけでは能動的なイベントなど望むべくもない。家でゴロゴロしているのが関の山だ。そもそもオレにとって休日など、単なる退屈で無意味な時間でしかない。他人に虚しいと思われようと、職場で雑務に追われていた方がマシというものだ。

そう考えれば、この家に人間らしい人間など一人もいない。ミドリは家事をこなし、オレは仕事をこなすだけの、単に社会の中で役割を果たしているだけの存在だ。妻が、ヨーコがいたからこそ、オレ達は家族らしい振る舞いをしていられたのかもしれない。いや、きつとそうなんだろう。

「……とはいっても、どこで何をしたらいいのやら、何も思い付かんしな」

「どうかなさいましたか？」

こちらのボヤキが聞こえたのか、紅茶をトレイに載せたミドリがいつもながらの無表情で小首を傾げている。この程度の変化すら、ずいぶんと久しぶりに見たような気がした。

「いや、たまには出掛けたりした方がいいかなーとか思ってたね」

「良いアイデアだとは思いますが、少ない休日を休息に活用なさるのも大切なことだと思います」

「そうだな。特にここのところ休んでなかったから」

「無理をなさってお体を壊さないで下さいませ」

そんな気遣いの言葉と一杯の紅茶を残して、ミドリは立ち去った。言葉自体には丁寧な気配りを感じるが、そこに宿る感情はやはり希薄だ。昔は、まだ妻が生きていた頃はもう少し柔らかいというか、表情豊かに感じたのだが、それは錯覚というものか。幸せな日常であつたことを思えば、美化されて然るべきものだろう。

「ん、うまい」

それを証明するように、紅茶の味は昔と変わらなかった。

そういえば、こんな風に紅茶を飲むこと自体が久しぶりのことだ。一ヶ月前の休みは、妻の一周忌のための休日だったから、休まる暇なんてなかった。ミドリの言葉があつたからというワケじゃないけど、少し働きすぎなのは間違いない。もしヨーコが生きていたら、気遣うどころか叱られていただろう。アイツが逝つてもう一年以上、そろそろ仕事に逃げ続けるというのも限界かもしれない。

過労で倒れたなんてことになったら、それこそ死んだアイツに怒られそうだ。

「ミドリ」

「はい、何でございましょう？」

丁度ソファの後ろを通りかかったミドリが、洗濯物の入ったカゴを抱えたまま立ち止まる。

「何か甘いものはないかな。ケーキとか」

「冷蔵庫にチーズケーキがございませうが」

「それでいいや。頼めるかな」

「はい、少々お待ち下さいませ」

持っていたカゴをその場に下ろし、落ち着いた足取りで台所へと向かう。

それにしてもチーズケーキか。ミドリが気を遣ったにしては不思議なチョイスだ。何故なら、チーズケーキは妻の好物であり、オレの好物ではなかったからだ。嫌いというほどではないが、妻ほど熱心ではない。昔は冷蔵庫を開ければ、一つはチーズケーキが必ず見付かるというほどだったが、その名残がミドリの中にもあるということなのだろうか。いや、そこまで勘ぐるのは人間の感傷というものか。

「トシオ様」

「ん……どうかしたか？」

呼び掛けに応じて振り返ってみると、珍しく眉根を寄せたミドリが手ぶらのまま立っていた。どう見ても、チーズケーキが出てくる気配はない。

「申し訳ありません。チーズケーキはありませんでした。私の記憶違いであったようです」

「そっか……」

「代わりとっては何ですが、おかきやお煎餅ならございますが」  
「まあそれでもいいか」

好みから言えば、ケーキより煎餅の方が好きなクチだ。もっとも、紅茶に合うかは微妙だが。それにしても、甘い物という注文も忘れていたのだろうか。チーズケーキがなかったことも含めて、メイドロボが勘違いをするのは珍しいことではないのだろうか。少なくとも、昔はこんなに忘れっぽかったという印象はない。もしかするとどこかに不具合でも抱えているのやも知れない。

「どうぞ。失礼いたしました」

「ああ、いや、別に構わないよ」

目の前に並ぶ紅茶とおかき、別に不思議というほどの光景ではないが、どこことなく不自然だ。

ミドリがこんな風に抜け始めたのは、一体いつのことだろう。とりあえず、ヨーコが生きていた頃はもう少ししっかりしていたという印象がある。もちろん当時と今とでは、家事の負担というだけでも大きな開きがある。ヨーコは家事が好きで、仕事もしていたが、できる時には家事にも精を出していた。ヨーコにとつてのミドリは、単なるお手伝いロボットというよりも、同じ仕事を楽しめるパートナーに近かったのかもしれない。ヨーコはもちろん、ミドリの表情が豊かに見えたのも、指示や命令ではない会話が存在していたからなのだろう。

だとしたら、やはりヨーコの死が今のミドリに何らかの影響を与えていることは間違いない。ただ、だからといって『記憶違い』などという現象が起こり得るのだろうか。

疑問と不安を胸に秘めたまま、横目でミドリの姿を観察する。

彼女は掃除を開始したようで、布巾で棚の上を拭いていた。

「あれ？」

少しばかり違和感を覚え、ソファの後ろを確認してみる。するとそこには、洗濯されて干されるのを待ち望んでいるシャツやらタオルやらがカゴに入れられたまま放置されていた。どう見ても、洗濯が終わったようには思えない。

「えーっと、ミドリ？」

おずおずとながら、聞いてみることにする。

「何でしょう？」

「洗濯、終わってない……よね？」

そう言いながらカゴを指差すと、ミドリは一瞬キョトンとした後、慌ててペコペコと頭を下げ始めた。

「申し訳ございません！ すぐにいたします」

布巾を放置し、カゴを持ち上げて二階のベランダへと向かう。あの様子だと、今度は布巾を忘れそうだ。いや、きっとそうなるだろう。ここ最近こういうミスが多いことからすれば、ほぼ間違いない。ただ、一度や二度なら偶然という理由も通るだろうが、思い付くだ

けでも片手では足りないほど連発されると、さすがに何か原因があるのではないかと思えてくる。それもヨーコの死がショックだったなどという精神的なものではなく、もつと物理的な理由が、だ。その心当たりは、全くないというワケでもない。

ヨーコが死んだ後、警察の捜査の中でミドリの記憶が吸い出されたことがある。ミドリは事件直後の有力な目撃者であり、当時ヨーコの唯一の同伴者でもあるのだ。そのため、捜査に必要な証拠であるとして、事件前後の記憶は警察に押収されてしまった。

そう、妻の死は事故や病気によるものじゃない。それは明確な殺人だった。ただ、通り魔的犯行でありながら目撃者がいなかったこと、物証が少なく手掛かりに乏しいことなどから、犯人は未だに捕まっていない。そのせいもあって同伴者だったミドリの記憶に期待が寄せられたのだが、ミドリの記憶にあるのはヨーコの姿ばかりであり、肝心の犯人は全く映っていないかった。オレにとって救いだっただのは、ヨーコへの対応が適切かつ完璧なもので、ここまでやりながら助からなかったとすれば仕方がないと納得させられたことくらいだ。

結局、犯人についてわかっていることと言えば、犯行当時に幅二センチ程度の刃物を持っていたということと、革靴を履いていたことくらいである。一応足音などから標準的な体型の男性ではないかと予測されているが、あくまで予測の範囲を出ない。つまるところ、どこの誰に殺されたのか全くわからないというのが実情だ。そしてだからこそ、オレは一年以上経った今でも、落ち着いた生活など送れない状況にある。

少し前まで、オレはミドリが羨ましいと思っていた。辛い記憶を忘れ、事務的に元の生活へと戻れる心無い存在となれば、どんなに気持ちが悪くなるだろうと考えていたからだ。あるいは、自分もそうなりたいたいと思ったからこそ、過剰に仕事へ没頭していたのかもしれない。

だけど、それはもしかしたら大きな勘違いであったのかもしれない

い。ミドリもまた、心と呼べる部分に大きな傷を負い、苦しんでいるのかもしれない。だからこそ、まるで故障しているのではないかと思えるような状況に陥っているのかもしれない。もちろん、コンピュータに心があるのかと問われて簡単に頷くことはできないが、それでもこの不可思議な状況がヨークの死に端を発するのだとすれば、同じ被害者として何とかしてやりたいと思える。

「……もしヨークなら、きっとそうするだろうしな」

ヨークにとつて、ミドリは紛れもなく友人だった。少なくともヨークはそう思っていた。そういう女性だったからこそ、オレは彼女に強く惹かれたのだ。

オレは決意する。

ミドリがどうしてこんなことになっているのか、その原因を調べてみよう。

ただ、調べると決めたところでオレはメイドロボの専門家ではないから、その類の専門知識など持つてはいない。かといって業者に頼んで頭の中を覗いてみたり分解してみたりというのも、この段階ではいささか乱暴な気がする。そんなことをしたら、ミドリが自分を『故障している』と思ってしまうだろう。もし故障でない理由があるのなら、そんな不安を抱かせるのは得策とは言えない。

「そうなるか……」

とりあえず、情報収集しかあるまい。

まずは今日一日、その行動を監視してみることにしよう。

「トシオ様」

「はわっ！」

背後からの呼び掛けに、不覚にもソファの上で跳び上がる。ありもしないことだが、内心を読まれたのではないかという不安がよぎった。だが、そんなオレの様子に関心がないのか、ミドリは相変わらずの無表情で事務的な報告を続ける。

「そろそろお夕飯の買い物に行つてまいります」

「あ、ああ……そっか。もうそんな時間か」

ふと天井付近にかかっている時計を見れば、そろそろ午後二時を回ろうとしていた。普段は仕事だから毎日監視しているワケではないが、この時間に関い物に出るのは妻が生きていた頃からの習慣だ。

「何か、献立にご希望などはございますか？」

「いや、任せるよ」

「かしこまりました。では、行ってまいります」

「ああ、行ってらっしゃい」

何だか懐かしい気すらする言葉で送り出し、オレはソファに戻ることなく書斎へと向かう。もちろん、読みたい本があるとか残した仕事があるとか、そういう理由じゃない。端末からメーカーのサービスページに入り、ナビゲーション機能でミドリの動向を監視するためだ。本当なら尾行でもした方が確実なのだが、そこまで不審な調査をしているワケではないし、ミドリに不要な疑念を持たれたり近所にメイドロボをストーキングしているなどと不名誉な噂を流されたりするのもゴメンだった。そもそも定期的にメイドロボの動向をチェックするのはユーザーとして当然の行為だろうし、今までそういうことがなさすぎたとさえ言えるかもしれない。

「そういえば、ミドリがウチに来る前は一緒にスーパーへ行っていたな」

近所にスーパーは二店舗ある。ヨーコは状況に応じて使い分けていたようだが、同行していたオレには違いが全くわからなかった。女というのは身近にある小さな変化に敏感な生き物だと、つくづく思ったものだ。

約一時間後、ミドリが二つのスーパーを回って家路を辿り始めた頃、さすがにオレも監視に飽き始めてきていた。買い物は滞りなく片付いたようで、特筆するような行動は見られなかった。もちろん現在位置がわかるだけで細かな動作まではわからないが、同じ所を行ったり来たりなどの不自然な行動が見られなかったことは事実だ。オレはモニターを閉じ、そろそろ戻ってくるであろうミドリの出

現に備えて居間へ向かうべく、愛用の椅子から立ち上がる。

と、ふと視界に入った時計の針を見て、違和感を覚える。

ミドリが買い物に出る時刻は午後二時丁度、それはいつもの習慣だ。そして同じく、帰ってくるのも午後五時が通例だった。少なくともオレの記憶にあるミドリの帰宅は、夕飯の準備を開始する直前であるはずだった。

「偶然なのか、それとも……」

オレが記憶している時だけ帰るのが遅いという偶然は、決して起こり得ないことではない。だけど、オレはその発想を全く納得することができなかつた。だから、ここ一週間の動向記録を呼び出した時、むしろ気持ちはスッキリした。

間違いなく、ミドリは毎日二時に買い物に出て、五時に帰宅している。ただ、その理由には皆目見当がつかなかつた。そもそも、目的をすでに果たしているハズのメイドロボが帰ってこない理由など、一体誰に尋ねれば解決すると言うのだろうか。仮に故障だとしても、どんな理由でこんな不可思議な現象が起きているのか、明確になることなのだろうか。

「んーむ……」

ウインドウを操作し、どこでどの程度の時間を消費したのかが比較できるようにタイムスケジュールを表示してみる。とりあえずここ一週間の記録に限って横に並べてみた。

買い物と一言に言っても、その目的地がいつも一緒であるとは限らないし、そのために消費する時間が確実に同じであるとも限らない。むしろ買い物に関して言えば日によってまちまちで、これといった共通項は見当たらない。強いて言えば、近所と言える場所の外側まで足を伸ばすことがないという程度のことだ。時間的にはバラバラで規則性に乏しいものの、大体一時間で済ませることが多い。

そして問題なのは、その後だ。

ミドリは以降の約二時間を、決まった三ヶ所で過ごしている。待ち合わせとショッピングのメッカである駅前広場、この町を一望で

きる唯一のスポットである展望タワー、そして何度となく足を運んで話をした思い出の場所たる近所の児童公園、いずれもがオレと妻にとつて思い出深い場所であり、だからこそ単なる偶然であるとは思えなかった。何か意味があり、ここで何かをしているのではないかと、そう思わせた。しかし記録を見る限り、ミドリがこれらの場所では何かしらの活動をしていたとは言い難い。それぞれの場所で十分ずつ過ごしているが、いずれも全く移動することなく身体的な機能はほぼ停止状態にある。つまり、ジツとしたままポーズと過ごしていた、ということだ。

正直言つて、奇妙極まりない。

「……駄目だ。こんなもん見ててもサツパリわからん」

奇妙なのは間違いない。だが、奇妙であるということがわかったところで何も意味はなかった。オレが求める答えは、もっと別のところにある。

「仕方ない。直接様子を見てみるか」

時刻を確認すると四時を少し回ったところだった。今から展望タワーに行つても間に合わないだろう。これから近所の児童公園に向かえば、むしろ丁度良いタイミングになりそうだ。

それにしても、オレは一体何をしているのやら。

メイドロボの調子がおかしいと思うのなら、メンテナンスなり何なりを考えるのが普通だろうというのは自分でもわかっているつもりだ。それをこんな、まるで娘の様子がおかしいからと狼狽しつつコソコソと調べている父親のようではないか。

だが、何故だろう。馬鹿馬鹿しいとは思いつつ、やめようとは少しも思えなかった。それはきっとヨーコにとってミドリが友人であったからで、ヨーコという共通の憂いを抱える仲間であったからだと思う。つまるところ、オレは淋しいのだ。そして、同じように淋しがってくれる相手を求めているのだろう。だからこそ、ミドリの不審な行動が淋しさの現れであると、そう信じたいのかもしれない。

児童公園に、子供の姿はない。

今時の子供にとって、ここは何一つ魅力を持たない場所なのかもしれない。そしてそんな公園の隅にあるペンキの剥がれかけた赤いベンチに、ミドリは座っていた。何もせず、少しだけ上を向いて、ただ座っていた。

オレは、隠れるつもりだった。隠れて見張る、そのためにここへ来たつもりだった。

それなのに気が付くと、視界の真ん中にはミドリが居て、その姿から視線を外すことができなかった。彼女は独りぼっちで、悲しみと淋しさを纏っていて、今にも泣いてしまいそうな小さな女の子のようだった。

いや、そうじゃない。オレはミドリが可哀想だったから、慰めたかったから近付いたのではない。今の彼女が見ているモノ、そこにヨーコの姿を感じたからだ。

「ミドリ……」  
だから呼び掛ける。

「ミドリ！」

「……はい、トシオ様」

「一つ、聞かせてくれ」

「何でございましょう」

「お前は、何を見ているんだ？」

「過去を……いえ、ヨーコ様との思い出を見ております」

「そうか……」

オレの頷きに、ミドリは少し微笑んで小首を傾げる。その様は普段の無表情とは別人で、ヨーコが生きていた頃を思い起こさせた。

「……やめるとは、おっしゃらないのですか？」

「やめろって、何を？」

「気付いていらっしやるのでしょうか？ 私の記憶容量が、日常の雑務をこなすことに不備を生じてきていることを」

「それは……まさかその理由が」

ミドリは小さく、だがしっかりと頷く。

「毎日、ヨーコ様との思い出を、余すことなく更新し続けているからです。そのため、極めて近い過去の記憶さえ、私は残さなくなりました」

「な、何でそんな……」

ミドリがヨーコという存在を大切に思ってくれていることはわかる。しかしだからといって、機能不全に陥るまで記憶を上書きし続けるなど、いくら何でも無茶な話だ。古い記憶は自然に風化していき、だからこそ我々は毎日を正常に過ごせるのではないのか。

「思い出が欲しかったのです」

「思い出って……楽しいことだけピックアップして憶えておけばいいじゃないか。あとは笑顔とか、印象深い言葉とか、そういうものを集めて、データ化しておけばいい」

「できません、そんなこと」

「できないって……」

「私は、人間ではないのです。記憶を判別し、美化し、形を変えて思い出に変換するなんてことは、私達にはできないんです。残すか、失うか、選択できるのはそれだけなんです」

「そうか、だから……」。

「だから毎日更新して、新しい記憶として上書きしていたのか」  
「そうしなければ、古くなった記憶は失われてしまうから。」

「……人間が、羨ましいです。とても」

俯き、伏せた表情で感情を隠す。それはミドリなりの、悔しさの表現であったのかもしれない。思えば、ヨーコは人前で弱い部分を見せるのが嫌いだった。彼女がそれを受け継いでいたとしても不思議ではない。むしろ過ごした時間を考えれば、当然のことと言えるかもしれない。

ヨーコが死んで一年、オレは心のどこかで忘れようと思ってきた。忘れた方がいいと思ってきた。だけど、それはきつと間違いで、悲しい選択だったことだろう。多分、オレよりミドリの方が正しかったのだ。本当に苦しんでいたのは、オレなどではなかった。

「ミドリ、ゴメン」

差し伸べる手を、ミドリは不思議そうに見詰める。

「オレにも見せてくれないか？ お前とヨーコの『思い出』を」

「……よろしいのですか？」

「何が？」

「忘れなくても、よろしいのですか？」

「忘れてもらっては困る。それは、オレも淋しい」

「はいっ！」

オレ達は帰る。オレ達の大きな思い出が詰まっている、小さな家へと。

新しい思い出を創る、そのために。

そして後日、ヨーコを殺した犯人は逮捕された。

見付かったのだ。ミドリの思い出から、陰に潜んでヨーコを見張るストーリーカーの姿が。

これは一体、誰の導きによるものか。

ヨーコか、それともミドリか。

いや、多分違うだろう。

答えは、ずっとすぐ近くにあった。オレが逃げるのをやめたから、  
答えが視界に入ってきただけなんだ。

人間とは実に情けない。心底、そう思う。

(後書き)

話はまあまあだけど、警察仕事しなすぎだろ。  
とか自分で言ってみる(笑)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2667p/>

---

メモリー

2010年12月2日14時55分発行